

## 「収束雲帯」についてのコメント

最近の「天気」の新用語解説欄で永田(1991)が収束雲帯(带状収束雲)について解説している。「収束雲帯は、冬の寒気吹き出し時に日本海上のほぼ決まった位置に現われ易い幅の広い雲の帯である」という。しかし、その雲をなぜ収束雲と呼ぶのか説明がない。岡林(1969)が引用されているので図書室に行って読んでみると、収束雲という名称は1967年札幌管区気象台の技術時報掲載の報告で同氏が使い始め、「日本海収束線」でもたらされるから収束雲と名付けたらしい。

命名者に申し訳ないけれど、収束雲はあまりいい名称ではないから、今後使わない方がいいのではないかというのが、このコメントの目的である。その理由は、日本海に限らず、背の高い積雲系の雲(特にメソ対流系を構成する雲)の多くは、下層の収束に伴って発生するからである。大気の成層が条件付不安定であっても、地表付近の空気塊を自由対流高度まで上昇させなければ、こうした雲は発達しない。日射による地表面加熱などを除けば、この上昇運動はたいてい下層の収束によって起こる。

例をあげれば、寒冷前線・海風前線・衰退期の雷雲からの冷気外出流の先端などに沿って収束帯があり、積乱雲が発達し易い。アフリカ波動を含めて東風波動の谷の西側または東側で積雲活動が活発なものも、そこが下層の収束域だからである。既に1960年代初めの台風発達理論

のCISKでは、台風のエネルギー源である雲の中の潜熱放出量は、境界層内の収束に比例するとしている。一番いい例がITCZやSPCZ(南太平洋収束帯)で、ここでは積雲系の雲がよく発達する。しかし、こうした雲を誰も収束雲と呼ばない。どうして日本海の収束帯の雲だけを収束雲と呼ぶのか、誰も説明してくれない。

だいいち収束雲帯とか、それを直訳してconvergent cloud band(Nagata, *et al.*, 1986)という新英語を作る必要はないのではないか。cloud band in JSCZ(後述)とか、対象によっては日本海収束帯の渦列とか呼べば、充分間に合うどころか、対象をもっと明確に表現できると思う。

なお、今問題にしている収束帯については、浅井(1988)が日本海寒帯気団収束帯(JPCZ)という名称を提案している。これでもいいが、SPCZになぞらえて、岡林(1969)が既に提案した名称を線から帯に変えて、日本海収束帯(Japan Sea Convergence Zone)という名称でもいいと思う。

### 引用文献

- 浅井富雄, 1988: 天気, 35, 156-161.  
 岡林俊雄, 1969: 天気, 16, 79-80.  
 永田 雅, 1991: 天気, 38, 698.  
 Nagata *et al.*, 1986: J.M.S.J., 64, 841-855.  
 (東京大学海洋研究所 小倉義光)

### 小倉氏の「収束雲帯」についてのコメントに対する回答

基本的に小倉氏の考えに賛同いたします。解説の中に一言、表題の命名法に問題点があるので今後は用いないようにすべきであるということを入れておくべきだったと反省している次第です。

以下に若干の補足の説明をさせていただきます。小倉氏御指摘のようにconvergence band cloud, 収束雲帯という用語を最初に使ったのは岡林氏です。一方、これとよく似た新英語convergent cloud bandを最初に使ったのはNagata *et al.* (1986)ではなく、私の知る限りHozumi and Magono (1984)です。いうまでもな

く、先人の命名を無批判に受け入れて使用した点は筆者の不注意であり、この点に関しては小倉氏の批判をそのまま受け入れるものです。

なお、小倉氏と同様の批判は以前から時々頂いており、すでに学会の講演等ではつとめて、日本海(寒帯気団)収束帯(の)带状雲又は雲帯という表現を用いています(例えば1991年気象学会秋季大会予稿集P70参照)。ただし、論文等には、以前から継続している一連の研究の間に不統一を生じさせたくないため、やむを得ず収束雲帯(convergent cloud band)という用語を用